

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26360046

研究課題名(和文) 軍事主義から見る女性美術家と視覚表象

研究課題名(英文) Woman Artists and Visual Representation from the Militarism

研究代表者

北原 恵 (Kitahara, Megumi)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：30340904

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトの目的は、1930年代から50年代にかけての日本及び東アジア圏の女性アーティストと戦争との関わりについて、ジェンダーと軍事主義、移動の視点から捉え直すことである。具体的には、アジア・太平洋戦争期と占領期を経た戦後における女性画家の歴史と実践の調査、日本の植民地化と戦争が与えた東アジア圏の美術・文化表象のジェンダー的分析、当該時期の女性美術家自身による文章の収集と、基本文献集(『特集：谷口富美枝研究—論文・資料集』)の編纂・出版、同様のテーマを探求する研究者との国際的な交流を行った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the project is to rethink the relationship between war and the woman artists in Japan and the east asia from 1930's to 1950's. I reinterpret how war influenced the works of female artists in Japan and East Asia from the 1930s to 1950s from the perspectives of gender, militarism, and movement. Specifically, I study the history and practice of female painters in the postwar period following the Asia-Pacific War and the occupation; conduct a gender-based analysis of the East Asian artistic and cultural representations brought about by Japanese colonization and war; and collect the fundamental literature collections and present the writings of the female artists, themselves, from these periods.

研究分野：表象文化論 美術史

キーワード：軍事主義 ポストコロニアル 美術 移動 表象 戦争画 ジェンダー 記憶

## 1 研究開始当初の背景

女性美術家の描いた戦争画についての研究は、本申請者がこれまで行ってきたプロジェクトを中心に、実証的な研究調査が積み上げられてきた。その基盤は、1990年代半ばに結成された「イメージ&ジェンダー研究会」や、美術史学会、美学会、表象文化論学会、ジェンダー史学会などにおける個別研究の蓄積と研究者のネットワークに拠るところが大きい。

戦争画研究に関しては『戦争と美術1937-1945』（針生一郎他編、2008年）がまとめられ、実証研究は少しずつ進んでいるが、依然として一国主義かつ男性画家中心であり、女性の周縁化とグローバルな視点の欠如と理論不足は否めない。そこで研究開始当初までに共同研究の結果、海外の研究状況を把握し、東アジアを中心とした現代女性アーティストの活動について基礎的な調査を行ってきたが、植民地期の研究が手薄であり、一次資料へのアクセスが容易でないため、研究者の層が極めて薄いという問題を抱えていた。

テッサ・モーリス＝スズキが帝都型思考様式を覆す挑戦を続けているように、男性中心的モダニズム美学を批判し、ジェンダーの視点から「空間」を再検討する視点の浮上と議論（カレン・カプラン：2003年など）は、美術表現の分析にとっても極めて有用である。だが、また、軍事的な暴力を支える女性の貢献に対して女性の軍事化という概念を提起し、軍事主義と女性について発言するシンシア・エンローの視点を視覚表象分析においても導入する必要がある。一方、国際的に視野を向けると、従来ほとんど研究のなかった戦争を描いた女性画家について、ロンドンの帝国戦争博物館で2011年にWomen War Artists展が開催され、2014年6月にはオランダで国際学会「第二次世界大戦における戦う女性」が計画されるなど、海外でも新しい研究が始まっている。

## 2 研究の目的

本プロジェクトの目的は、1930年代から50年代にかけての日本及び東アジア圏の女性アーティストと戦争との関わりについて、ジェンダーと軍事主義、移動の視点から捉え直すことである。具体的には、アジア・太平洋戦争期と占領期を経た戦後における女性画家の歴史と実践の調査、日本の植民地化と戦争が与えた東アジア圏の美術・文化表象のジェンダー的分析、当該時期の女性美術家自身による文章の収集と、基本文献集の編纂・出版、戦争画を描いた女性画家を論ずる研究者との国際的な交流である。

特に従軍女性画家や、植民地体験、海外への移民体験を持つ女性画家の調査は、同様のテーマで多くの蓄積を持つ文学研究や、「移

動」や「旅」をめぐるポストコロニアル研究の理論枠組を導入することによって、歴史的な時空間軸を用いた多層的な考察・分析が可能となる。

## 3 研究の方法

研究方法は以下の3つの柱から成る。

(1) 戦時中、戦争画制作に関わった日本人女性美術家についての国内外および戦後期の調査。有名画家を除いてほとんど足跡が解明されていない現状であるので、関連文献の収集調査と並行して、遺族・関係者からの聞き取り調査を遂行する。特に植民地との関わりを解明する。

(2) 当該時期に発表された女性美術家自身による文献を整理し、基本文献資料集を作成するための研究会を開催する。さらにホームページを利用して資料の電子化によるデータの共有を行う。

(3) これらの作業を通じ、研究者・学芸員のネットワークを強化する。

予測不能な事態が起こりがちな海外での聞き取り調査やフィールドワークは、計画の進展に合わせた積み上げ型の調査を年次進行で行う。研究発表を各年度に行い、最終年度には報告集を刊行する。

## 4 研究成果

### 【2014年度（平成26）】

初年度は、前科研を継承・発展させて研究体制の構築と基本文献の収集を開始し、国内での調査を行った。具体的には、

(1) 「官展にみる近代美術」展覧会への協力、及び同展の協力調査（福岡、府中、津、神戸）展覧会批評などの出版。

(2) 国際フォーラム「20世紀前半、二重空間の韓国に生きた日韓の美術家たち」（韓国文化院）に参加し、植民地化、あるいは戦時下の日韓の美術家と最新の美術研究の調査。

(3) 筥崎宮における所蔵作品《大東亜戦皇国婦女皆働之図》の調査、及び、研究会開催（福岡アジア美術館）

(4) 「谷口富美枝（仙花）研究科」開催・発表。（谷口富美枝研究は出版。「モダンと伝統を生きた日本画家・谷口富美枝（1910-2001年）」『待兼山論叢』48（2014年度）、大阪大学文学研究科、2015年3月

(5) 広島県大竹市の戦時中・占領期の歴史に関する調査、フィールドワーク実施。

(6) 「宮良瑛子展」（丸木美術館）の調査と宮良瑛子氏の講演参加・聞き取り調査。

(7) 「吉田博・吉田ふじを展」（一宮市三岸節子記念館美術館）調査。

(8) 「赤松俊子と南洋群島展」（丸木美術館）調査、ほか、学会など参加。

### 【2015年度（平成27）】

(1) 谷口富美枝の共同研究と成果発表(3) 本科研とイメージ&ジェンダー研究会共催で2015年8月31日に実施(於・上智大学)。谷口富美枝研究の最前線の成果、及び、北米のアジア系アメリカ人アーティストの活動と研究について、北原恵(大阪大学)、金子牧(カンザス大学)、Scott Tsuchitani(visual artist)、角田知扶(呉市美術館)、村井則子(上智大学)が発表とコメントを行った。

(2) 国際学会・研究会での発表(豪州、韓国)と、戦争画の研究者との国際的交流: 6月18日、韓国高麗大学日本研究センターでの国際シンポジウム「ビジュアルの中のアジア太平洋戦争」に招待参加し、「戦争画とは何か アジア太平洋戦争期「御前会議」の表象をめぐって」を発表。継続的な国際研究ネットワークの構築と再確認を行った。

9月28日、シドニー大学で開かれた国際学会“Wounds, Scars, and Healing: Civil Society and Postwar Pacific Basin Reconciliation”に参加。“Women War Painters in Japan: Hasegawa Haruko's Wartime Activity and Postwar Oblivion”を代読発表。2016年2月12日、韓国・延世大学での「告学研究発表会」で同機関研究員として発表。

(3) 海外での論文出版: 『戦う美術: アジア・太平洋戦争と日本美術』(アヨン出版社、韓国、2015年10月)に論文「戦争画を描いた女性画家」を発表。

( )

#### 【2016年度(平成28)】

##### (1) 国際シンポジウム:

2016年7月、国際シンポジウム「美術と戦争: 1940-50年代、日本・朝鮮・台湾」を開催(平成28年度大阪大学国際会議助成を受ける)。韓国と台湾から美術史研究者を招き、1940-50年代の東アジアにおける戦争と美術の関わり・表象・活動を中心に取り上げ、多角的に議論した。国際シンポジウムでは、アジア太平洋戦争期の朝鮮半島における戦争画と美術活動(キム・ヨンチョル: 高麗大学グローバル日本研究院)、台湾の戦時期美術における国家表象(白適銘: 国立台湾師範大学美術学部)、日本における在日朝鮮人の美術活動(白凜: 東京大学総合文化研究科)、美術という場における戦争・占領の記憶と再編成(鈴木勝雄: 東京国立近代美術館)について発表を行い、それぞれ、専門的知見からコメンテーターが応答した。戦争がもたらしたものは何か 美術作品を通して、戦前・戦後の時代を検証する目的は、達成されたと言える。

同シンポジウムについては、表象文化論学会『REPRE』(29号 2017年 <https://www.repre.org/repre/vol29/topic/s/1/>)に報告を掲載している。

(2) (2) 海外出張往査:

オーストラリア: ANU、国立図書館、国立戦争記念館を調査(2016年6月) 韓国: ソウルにおいて民衆美術家たちの聞き取り調査、近現代史資料館など調査(2016年11月、2017年3月)。濟州島において濟州道美術館・濟州抗日記念館・濟州海女博物館・4.3記念公園・記念館他調査、美術家のアトリエ訪問(2017年3月)。

##### (3) 国内調査:

戦争表象を中心に富山妙子展(原爆の図丸木美術館)、柳幸典展、ポルトンスキー展調査。イメージ&ジェンダー研究会やジェンダー史学会に参加。

#### 【2017年度(平成29)】

2017年度は、前年度から繰り越した最終年度の研究期間である。主に、「軍事主義から見る女性美術家と視覚表象」のテーマのもとに行った研究報告書『特集: 谷口富美枝研究 - 論文・資料集』(2018年1月発行)を作成した。戦時下に活躍した女流美術家奉公隊の主要メンバーの一人であった谷口富美枝(日本画家)について、補足調査を行い、遺族・美術史研究者・学芸員・新聞記者らの論考と、谷口富美枝自身の書いた自伝的小説、年譜、文献資料一覧などを所収し、谷口に関する包括的な報告書としてまとめた。最終年度でまとめた谷口富美枝研究は、戦時下に女流美術家奉公隊の日本画部の代表として活躍した谷口富美枝を、戦時下だけの活動にとどまらず、戦前・戦後を通してその制作活動と人生の足跡を徹底して調査し、初めてまとめたことの成果は大きい。2018年1月には谷口富美枝の作品を所蔵する呉市美術館でも関連展覧会が開かれ、同館で講演会、及び第3回「谷口富美枝(仙花)」を開催した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
<http://www.genderart.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

北原 恵 (KITAHARA, Megumi)  
大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：30340904

### (2) 研究分担者

( )  
研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )  
研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )